

### オーラルヒストリーを使った教育実践： 「森の”聞き書き甲子園”」の活動

UMEZAKI, Osamu / 梅崎, 修

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2011-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007606>

〈資料紹介〉

# オーラルヒストリーを使った教育実践

—「森の“聞き書き甲子園”」の活動—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

## 1 口述資料の解題

### (1) 資料公開の目的

近年、初等・中等・高等教育の現場においてキャリア教育の一つの手法としてインタビュー調査を取り入れた授業が多くなっている。インタビュー調査によって他人のキャリア体験を間接的に経験することは、インターンシップのような直接的な体験と並んで効果的なキャリア教育として高く評価されていると言えよう<sup>1</sup>。

しかし、このような授業の運営方法に関しては、授業担当者間で情報やノウハウが共有されているとは言い難く、教育者本位の授業が行われている可能性もある。その一方で、インタビュー調査は、学問分野において社会調査論（なかでも質的調査・フィールドワーク）に位置付けられ、多くの教科書が刊行されている<sup>2</sup>。ここでは、学問としてのインタビュー調査とキャリア教育としてのインタビュー調査を区別しながら整理する必要がある。したがって本稿では、インタビュー調査の中でも、とくにオーラルヒストリー（もしくは聞き書き）と呼ばれる手法を取り上げ、森の“聞き書き甲子園”という教育実践にかんする取材記録を公開したい。このインタビュー調査は、2009年度梅崎ゼミの学外活動の一環として行われた。質疑応答は学生たちを中心に行われ、サポートする形で教員も質問した。語り手は、このプロジェクトの事務局を担当されている森山紗也子氏と中

野葉月氏である。この口述記録の読者は、インタビュー調査を教育に取り入れる際の工夫とその効果を学べるであろう。

ところで、オーラルヒストリーとは、歴史学の一分野・一つの研究手法であるが、近年は政治学、社会学、心理学、経営学などの学際領域として発展し、なおかつ研究以外の社会活動でも利用されている<sup>3</sup>。そもそも個人の記憶を聴いてその語りを記録するという活動自体は、歴史記録の初源とともにあったと言える。『古事記』という日本で最初の歴史書もオーラルヒストリーと呼ぶことが可能なのである。語りという方法によって個人記憶を記録・共有し、集団の記憶へと繋げていくことは、人間の社会活動として本質的な「動機」を含んでいると言えよう。しかし、話者の語りである口述史料の利用の際には実証的根拠について文書主義の研究者から懐疑を持たれることも多かった。言い換えれば、文書史料の方が重視されてきた歴史研究に対する批判として、口述史料の利用は再評価されるようになったのである。すなわち、オーラルヒストリーは、実証主義歴史学の広がりとともに忘れられ、その実証主義の定義を再検討する中で再構築された古くて新しい手法である。

オーラルヒストリーの第一人者として知られるエセックス大学のポール・トンプソンは、オーラルヒストリーという方法が資料の読み方を広げたことを積極的に評価している。これまで文書資料を自ら記すか、もしくはその行動が記されること

が少なかった人々の記録がオーラルヒストリーによって開拓された結果、歴史認識の偏りが調整され、新しい分析焦点や新しい研究分野が発見された (Thompson (2002) 参照)。

さらにトンプソンは、オーラルヒストリーは調査対象との協力を得ながら複数の調査者で行うプロジェクト調査に適していると主張する。オーラルヒストリーは語り手と聴き手の共同作業であり、聴き手は対象との良好な人間関係を構築する必要がある、またオーラルヒストリーは、狭い意味での学術研究だけに縛られることなく、歴史の理解を通じて我々自身が所属する社会や地域の活性化を考える活動でもある。古賀 (1981) や Mercier・Buckendorf (2010) などが紹介するように、イギリスやアメリカでは社会活動や地域活動としてのオーラルヒストリーがワークショップ形式で運営されてきたのである。

くわえて、トンプソンは、グループで行われるインタビュー調査は調査者間で協働し、教師と学生でグループが構成される時、上下関係に囚われない平等な関係が生み出されやすいと主張する。また、プロジェクト調査に参加する若手が語り手から学ぶことは多く、聴き手は単に歴史の理解のみに止まらず、コミュニケーション自体を学んでいく。プロジェクト研究は、研究でありながら教育にもなる。

さらに、多くのオーラルヒストリーには、高齢者の語り手と若年者の聴き手という世代間コミュニケーションが構築されるという特徴がある。異なる世代という他者とのコミュニケーションは、同年代とのコミュニケーションよりも学べることが多いと考えられる。

ところで、このような世代間コミュニケーションは、都市化、核家族化、さらに同世代が集まる学校という空間の拡大が進んだ現代社会において失われつつあるコミュニケーションの形である。フランス近代史を専門とする槇原茂は、近代化とともに変化した大人と子供の関係を検討し、子供が大人の話や聞き手としての役割が無くなったことを指摘している (槇原 (2009) 参照)。たとえば、フラ

ンス農村では中世以来「夜の集い」と呼ばれる慣行があり、近隣の老若男女が1軒の家に集い、糸紡ぎや農具の手入れなどさまざまな手仕事をしながら、薪や灯火の節約をかねて冬の夜長をとともに過ごしていた。このような世代間のコミュニケーションとして、まず親子関係があげられるが、それ以上に重要なのは祖父母とその孫の間の3世代間のコミュニケーションや親族外の世代間コミュニケーションであろう。しかし、このようなコミュニケーションの長期の地平は失われつつある。

コミュニケーションの重要性は、キャリア教育の実践者たちによって意識的に、もしくは無意識的に指向されている。自分自身でキャリア形成の力を学ぶためには、逆説的であるが、自分のことだけを見つめるのではなく、「他者」の多様な経験を学んだ方が有効である。第一に他者との関係を認識することが結果的に (他者との関係である) 自己像を構築することになるし<sup>4</sup>、第二に経験学習という視点から見ても年長者の複雑な経験を間接的に体験することは学びに繋がると言えよう。そのうえ、オーラルヒストリーを実施すれば、調査能力、書く能力と話す能力、録音機器やコンピューターなどの機械利用、および年上の人と話す際に必要な社会常識などの基礎的なスキルも身に付けられる。

しかし、一方でトンプソンは、学校におけるプロジェクト調査が失敗する可能性が高いことを指摘している。「オーラルヒストリー・プロジェクトは、経験豊かな技術をもった教師が、注意深く設定した文脈においてのみ成功する可能性がある。(Thompson (2002) 邦訳 356 頁)」たとえば、準備不足が調査対象 (語り手) への心理的な被害を生み出す危険性も高く、また準備をし過ぎると、支配的な言説となるように用意された情報が押しつけられる可能性もある。それゆえ、オーラルヒストリー・プロジェクト実施者の経験から学ぶことは多いと言えよう。それが、本稿の「プロジェクト実施者のオーラルヒストリー」を公開する目的である。

なお、本稿で紹介する教育実践は広い意味での

コミュニケーション教育と呼べるが、教育の現場や企業社会においてコミュニケーション、もしくはコミュニケーション力が過剰に強調されていることを危惧する研究もある。コミュニケーション力の具体的内容を定義することは難しく、学生に対しては「曖昧な」何かを身につけなければ、という心理的圧迫感を与えている。このコミュニケーション能力に対する過大評価とそれが生み出す不安感は、本田（2005）などでも社会構造の問題として批判されている。しかし、当然のことであるが、コミュニケーション能力自体が無価値ということではない。むしろ本稿では、曖昧なコミュニケーション力をあえて定義するのではなく、世代間コミュニケーションの実践へと焦点を移したい。この口述記録は、われわれのコミュニケーションに対する認識を再調整するであろう。

## (2) 森の“聞き書き甲子園”とは？

森の“聞き書き甲子園”の具体的な運営に関しては、後述する口述記録で説明されている。ここでは、森の“聞き書き甲子園”の発足経緯について説明しよう。それにはまず、森の“聞き書き甲子園”のモデルとなったアメリカにおける Fox Fire プログラムについて説明する必要がある。

Fox Fire プログラムを紹介した藤井（2009a, 2009b, 2010）、小川（1993）、Thompson（2000）によれば、このプログラムはジョージア州レイバン郡にあるナークチスクールの高校教師エリオット・ウィギンズ（Eliot Wigginton）によって1966年に創始された。ウィギンズは、大学で習った教授法が学生の読み書き能力の向上に効果を上げないこと気づき、「創作作文」という科目においてオーラルヒストリーを利用することを思い付いた。具体的には、生徒たちが地域社会に住む人々に対するインタビュー調査をして、採取された語りを基にした雑誌の制作・販売を行った。この Fox Fire 誌を編集した一連の選集は大ベストセラーとなった。学生たちは、この一連の作業に熱中し、

作業の中で読み書き能力、さらに聴く能力を鍛えた。この試みは評判になり、アメリカ全土で多くの教育機関がその教育手法を取り入れた。

Fox Fire プログラムを日本でも実施するために、2002年に林野庁と文部科学省の共同ではじまったのが、森の“聞き書き甲子園”である。現在は、林野庁・文部科学省・社団法人国土緑化推進機構・NPO 法人共存の森ネットワークの4者で構成する実行委員会によって主催されている。このプロジェクトでは、高校生が造林手、炭焼き、木地師など、森と関わるさまざまな職種の「森の名手・名人」を訪ねて1対1で「聞き書き」をしている。2010年度には、「海・川の名人」への聞き書きを行う海・川の“聞き書き甲子園”も水産庁の協力を得て開催された。

また、聞き書きの内容は、ホームページ（聞き書き電子図書館）でも公開されているが、商業出版物として人の森プロジェクト編集（2004）『森の人、人の森。一森の“聞き書き甲子園”が高校生にもたらしたもの』（ウェッジ）、森の“聞き書き甲子園”実行委員会事務局編集（2006）『森の名人ものがたり（ASAHI ECO BOOKS）』（アサヒビール）にまとめられている。2011年3月には、森の“聞き書き甲子園”の活動を取材したドキュメンタリー映画『森聞き』（柴田昌平監督）が公開された。

森の“聞き書き甲子園”は、調査対象との関係づくり、インタビュー調査法の教育、語りの編集方法について数々の実績を積み上げてきた。だからこそ、教育実践者がこの口述記録を読めば、教育実践について多くの発見があると言えよう。

## 謝辞

本稿は、「2009年度法政大学特別研究助成」による成果である。この場を借りて感謝申し上げます。また、お忙しい中、インタビューをお引き受け下さった NPO 法人共存の森ネットワークの皆様へ感謝申し上げます。

## 注

- 1) 中等・高等教育におけるインタビュー調査を使ったキャリア教育実践については、坂倉（1998）、藤本（2002）、および平尾（2005）などがあげられる。
- 2) 御厨編（2007）や酒井（2008）をあげておく。
- 3) 各学問分野におけるオーラル・ヒストリーの進展は大原社会問題研究所編（2009）が参考になる。
- 4) 他者との関係性がキャリア意識に与える影響については、代表的な理論研究として溝上（2008）があげられる。

## &lt;参考文献&gt;

- 大原社会問題研究所編（2009）『人文・社会科学的研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房
- 小川浩之（1993）「アメリカの地域学習におけるオーラル・ヒストリーの研究：Georgia州 Rabun County における "Foxfire" magazine を事例として」『筑波社会科学研究』12,11-23
- 古賀秀男（1981）「イギリスにおける民衆史の掘りおこし - ヒストリー・ワークショップとオーラル・ヒストリー（民衆史掘りおこし運動 <特集>）」『歴史評論』(375), 9-22
- 酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー - 歴史を書く力を取り戻す（かわさき市民アカデミー講座ブックレット）』かわさき市民アカデミー出版部
- 坂倉恵美子（1998）「インタビュー体験が学生に及ぼす教育効果：老人看護学授業方法の検討」『北海道大学医療技術短期大学部紀要』11,79-84
- 藤井大亮（2009a）「教員研修プログラムの構造と特徴 - 米国ジョージア州 Foxfire センターにおける夏季研修コースの参与観察から」『千葉経済論叢』41,37-62
- （2009b）「オーラル・ヒストリーを導入した米国の歴史授業実践の分析 - Foxfire アプローチの視点から」『中等社会科教育研究』(28), 1-15
- （2010）「米国ジョージア州の "Foxfire"

- 誌におけるオーラル・ヒストリーの変貌」『日本オーラル・ヒストリー研究』(6), 15-167
- 藤本英二（2002）『聞かしてえ〜な仕事の話』青木書店
- 平尾元彦（2005）「キャリア教育の手法としての、のキャリアインタビュー」『大学教育』2, 85-94
- 本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会 - ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- 楨原茂（2009）「オーラル・ヒストリーと教育」『島根大学教育学部紀要・教育科学・人文・社会科学・自然科学』42別冊, 25-32
- 御厨貴（2007）『オーラル・ヒストリー入門（岩波テキストボックス）』岩波書店
- 溝上慎一（2008）『自己形成の心理学 - 他者の森をかけ抜けて自己になる -』世界思想社
- Laurie Mercier, Madeline Buckendorf (2010), *Using Oral History in Community History Projects*. Oral History Association
- Paul Thompson (2000), *The Voice of the Past: Oral History 3rd ed.* Oxford (ポール・トンプソン)
- (2002) 『記憶から歴史へ - オーラル・ヒストリーの世界』青木書店
- Paul Thompson. (2002) 「オーラル・ヒストリーの可能性と日本との関連」『三田学会雑誌』第96巻第3号, 291-313

## 2 口述記録

質問 まず、聞き書き甲子園の事業の全体のことについて、お話を伺ってもよろしいですか。ホームページを見て調べてはきていますけれども、具体的にどのようなことをされているのでしょうか。

——— 皆さんのお手元にパンフレットがあります。ちょうどいま第8回の「森の“聞き書き甲子園”」の募集をしています。この「森の“聞き書き甲子園”」は、平成14年に林野庁と文部科学省の共同で始まった事業です。全国の高校生が、「森の名手・名人」と呼ばれる人に会いに行

き、「聞き書き」という手法を使ってインタビューをしてもらい、それをレポートにまとめるという1年間の授業になります。いま第8回目ですが、第2回からNPOも加わりまして、あと社団法人国土緑化推進機構という緑の募金をやっている団体の4者で主催をしています。高校生は、毎年100人に集まってもらっています。

1年間の流れとしては、まず7月の夏休み前に参加高校生を募集します。その後、参加高校生が決まった段階で、今度は8月の夏休みの間、3泊4日で東京に全員集まってもらって、聞き書きをどのようにするのかという研修を行います。そのなかで、聞き書きの方法とか、取材に行くときにどのようにしたらいいとか、そもそも「森の“聞き書き甲子園”」は何をやっているところなのか、そういうことを最初から説明をします。聞き書きの手法についても、2日目に丸1日かけて実習という形で、実際にもう聞き書きをやってみるという形で学んでもらっています。

その3泊4日の研修が終わった後、今度は9月に、取材に行く先の森の名手・名人、たとえば造林業をやっているとか、炭焼きさんだったりとか、あと木工業で木を使って伝統工芸品をつくったりしている方、それから森の案内人（森林ガイド）とか、そういう人たちのところへ取材に行ってもらいます。その名人100人が9月の頭に決まるので、そこから高校生と名人の組合せを決めて、9月の後半ぐらいから12月にかけて、高校生には取材に行ってもらいます。基本、2回取材に行ってもらって、そのなかで聞き書きしたものをまとめて、最後、5000文字程度のレポートにまとめて、1月の半ばに提出してもらいます。それを最後、作品集にまとめて、3月にフォーラムがありますので、そちらのほうで発表するという形になっています。

質問 100人を決めるというのは、どんな形で決めていらっしゃるんですか。

—— さっき言った国土緑化推進機構には全国、各都道府県に出先機関があって、それぞれの県にそういった「森の名手・名人にふさわしい方はい

ませんか」という話を投げて、各県から候補をあげてもらうんですね。あおれで、最後にその候補をまた市のほうで選定して、この人がふさわしいということで100人選んでいきます。

質問 高校生との組合せを決めるのは、こちらのほうでやられているんですか。

—— はい。高校生も名人もなるべく各都道府県から出てもらいたいので、全部ではないですけども、ほぼ40都道府県ぐらいからは出てきてもらいます。さすがに高校生なので遠いところに行くのは大変なので、なるべく同じ県内で名人と高校生の組合せを考えていって、ちょっと交通の便の悪いところなどは、交通の便のいい東京から飛行機とかで行ってもらったりします。

質問 この授業を始めた目的は何でしょうか。

—— そもそも、いままでは森からいろんな山菜を取ったり、木を伐ってそれを器にしたり、そういった職人さんたちがいたんですけど、高度経済成長期以後、生活の様式が変わっていくなかで、そういった木を使う文化が徐々になくなってしまっている現状があったんですね。たぶん皆さんも、いま「木と暮らしがどうつながっているの？」って聞かれると、お碗で見たり、家を建てるのに柱でちょっと使っているとかは思うでしょうが、昔の写真を見ると、本当にいろんな用途で木って使ってきたんですね。

そういった部分の日本独自の文化だったりするものが、おじいちゃん、おばあちゃんの手業のなかに残ってはいるけれども、そうした手業が繋がってきていない。プラスチックとか石油製品が主流になってきたなかで、そういった技や知恵が失われていってしまうという危機感があったんです。何かこう日本の大切なものを失ってしまうんじゃないかと思い、それを次の世代につないでいきたいと思って。こういった森と係わった仕事をされている方々の知恵とか文化を文字として残そうという活動を、8年前に国の事業として始めました。

最初は、「森の名手・名人」を認定して、名人として表彰して、「もつとがんばっていただく

さいね」という予定だったんですけれども、認定しただけだと何も記録としても残らないし、誰かにその思いが伝わるわけでもない。今、私たちのNPOの理事であり、この聞き書き甲子園を指導して下さっている塩野米松さんという作家の方が、聞き書きという手法を用いて今までいろいろな本を書かれてきて、その方が、「それだったら高校生が名人の話を聞いてレポートにまとめるという形で、次の世代につないでいく方がいいんじゃないか」という提案をして下さったんです。最初は名人の認定だけが一人歩きしようとしていたところが、そういう提案が一緒にあがってきて、今の形になっています。

**質問** 大学とかではなくて高校生の子にというのは。

—— たぶんグループで取材に行くという計画もあったんですけれども、グループだと「あの子に話を聞いてもらえばいいや」という感じで、1対1にならない。他人任せになってしまう。やっぱり一人一人がきちんと向き合って、1対1で話を聞いてもらいたいということがあって。そうすると、名人のところ取材に行くときに1人でいきますよね。中学生にちょっと一人旅をさせるのは、まだ早いかなというか、遠方になる場合もあるので。そうすると、高校生ぐらいだったら一人旅で大丈夫だなと。

じゃあ、なんで大学生じゃないかというのは、高校生はまだこれからのことが見えていないわけです。ざっくりとは考えていると思うんですけれども、大学生になるとある程度自分の研究対象とか、知りたいものが結構きっちり見えてきていて、名人のところ取材に行くと、自分の知りたいことだけを突き詰めて聞いていってしまうという部分がある。でも、名人さんはひとつのことを極めてきた人だから、その話はもちろんできるんですけども、もっとその背景にある部分を聞いてもらえば、よりいろんなことが聞き手にとっては勉強になってくると思う。大学生だと、ある程度自分の軸ができつつあるところだからその裏の部分を幅広く聞き出すということが少ない。

高校生は、まだ何もわからないことが多いけど、とにかくぶつかっていってみて、いろいろな話を聞いてみようというスタンスで行きます。でも、これからちょっと真剣に、人生どっちに歩いていこうって、進学しようかどうかどうしよう、就職しようかどうかどうしようって悩んでいるぐらいの高校生に名人と出会ってもらったほうがいいなという思いで、高校生という選択をしています。

—— 森の能手・名人は、みんなプロなんですよ。森に行っても、この森はいい森だ、悪い森だっていう判断も、もともとそういうところに住んでいる人でないとまったくわからない。高校生が名人の仕事の話を聞いても、何のことを言っているかさっぱりというのが多いと思うんですけれども、本当にさっぱりわからないゼロの状態から、「あれは何ですか」「これは何ですか」って無邪気に、本当にもう知りたいという気持ちで聞いてくれると、名人もそれをとても喜んでくれます。じゃあもっと話してやる、もっと話してやるって。自分の孫に話せないようなことも話してくれる。初対面の高校生だからこそ話せることもあって、こちらが意図していなかった面もできます。

**質問** 高校生側の参加動機って、どんなものが多いんですか。

—— いま、みんな環境に関する授業をやっていたり、ニュースでも結構、CO<sub>2</sub>削減とか温暖化とかいう話が多かったりするので、その部分の切り口で応募の動機を書いてくる子がほとんどですね。こちら応募作文を見て選んではいるんですけども、もうみんな参加してほしいぐらい、みんなしっかりしているし、何が聞きたいかというのもしっかりしています。なかには、自分のお父さんが林業をやっていて、もっと林業のことを知りたいという子もいますけれども、そういった子はまれですね。

**質問** 聞き書き授業に参加した高校生で、森の能手・名人の話を聞いて感銘を受けて、林業の道へ歩んだ卒業生はいるんですか。

—— もちろん、林業の道を選んだ子もいます。

高校を卒業してすぐ県の営林署とかに勤めるという子もいました。各地区で卒業生たちの森づくりがあるんですけども、その子は今でもそちらの活動に参加しています。今はつながりがなくなってしまった卒業生でも、名人さんのところに林業の話の聞きに行っているらしいです。話を聞いてそれで終わりではなくて、毎年夏休み、春休みとか、長期の休みに入るとそのおじいちゃんのところに林業を学びに行っている。まだその仕事に就いたかどうかかわからないけれども、そういった形でつながりをもっている人もいます。

この聞き書きに参加したからといって、林業の道を選ぶという子は少ないとは思っています。ただ、進路を選ぶ上で、環境系のことをやろうかなと思って、そっちのほうを目指す学生も増えていると思います。あと、この名人との出会いを大切にしている、毎年お手紙をやりとりするだけではなくて、たとえば就職を迎えた時期になって、人生またどうしようかなって悩んだときに、ふと名人のところに会いに行くこともある。別にそれが具体的な何かにつながっていくわけではないとは思いますが、とにかくもう一度名人に会いに行く子がいたんですね。そうすると、名人さんと話をすることで、何かふと自分の原点、何が大切だったのか、名人と出会って大切だなと感じたことを、ふっとまた我に返るといふか、思い出させてもらえる。いままで戸惑っていた気持ちが前進するようなことがあるとか。仕事を選ぶ上というよりは、人生でどう歩いていったらいいのかという部分で、名人がひとつの軸になっていたという高校生が多いです。

—— 結構、いろんな職種に行っていますよね。本当にそうやって林業につく人もいれば、手業にすぐ憧れて、しな織りという織物があるんですけども、それを学ぶために研修生として2年間入っている子もいます。あとは、ずっと活動に関わっているいろいろとやってきてくれた埼玉の子なんですけど、今は新潟のほうで生産森林組合に入っていて、ちょうどこの春から林業を始めました。

—— ちょうど第1回の聞き書き甲子園に参加し

た子たちが、今年就職をしたり、大学に行ったりという道を選んで、新しい人生へステップアップしているんですけど、ほんといろんな仕事に就いています。森とはまた違う分野だけれども、やっぱり、この活動のことがひとつの軸になっていたと思う。

—— 珍しいなとか、どうやって伝わるんだろうと思うけど。1人、1期生の子で、大学院に行っている子がいるんです。その子はイスラムの文化について勉強していて、その勉強と名人の考え方に通じるものがあるというんです。じつは両方とも大事なもので、お互いにつなげて考えることができるんだと言っています。本当に、聞き書き体験がどういうところに影響するかは人それぞれですね。

質問 卒業生としてアドバイザーや講師で来てもらうこともありますか。

—— はい。それはもう、その子たちの力がないとなかなか研修が運営できない。というのも、毎年100人の高校生が研修に集まって、その指導をするときにだいたい15ぐらいのグループに分かれるんですけども、それぞれのグループにリーダーが付いて引っ張ってくれるんです。そのリーダーを卒業生に担ってもらっていて、毎年20人ぐらいのOB、OGが、3泊4日の研修の運営自体も係わってくれる。本当に、どのように聞き書きを行っていったら参加者にわかりやすく、かつ、いい実習ができるかを研修の前に何回も集まって、プログラムを考えて、当日に臨む。その後、取材に行くときにどんな服装をしていったらいいかとか、どんなことを質問したらいいかとか、あとは些細なことでは、名人に最初にどのように電話をかけたらいいかとか、そんな細かい疑問なんかは、ぜんぶグループのリーダーの卒業生に連絡をとって聞いてもらう。細々としたアドバイスもぜんぶ卒業生がしてくれますね。

—— だいたい、名人さんはメールを使える方が少なく、直接電話しないとなつながらないんです。こちらとしてはアポとりから高校生でやってほしいということで、名人のプロフィールを高校生に



送っています。自分で手紙を書くなり電話するなりで、連絡をとって取材日を決めなさいと教えていて。そうするとやっぱり、初めて名人に電話をかけるときは……。

写真が付いているんですよ。名人の写真で、なぜか写り方が怖いんですね、だから、すごく怖そうとか思いながら、ドキドキしながら電話をかける。何も書かずにいきなり電話をすると、頭の中が真っ白で何を言ったらいいかわからないから、一言一句、言うことを作文して、電話をする子もいました。卒業生から「僕はこういうふうにしたよ」というアドバイスがあったんです。自分で文章を書いてから電話をするという子もいれば、話好きな子はたぶんそのまま電話をしてしまう。

卒業生たちは、自分たちが名人と出会っているようなことを教えてもらったからいろんな高校生に体験してもらいたいといって研修をサポートしてくれているんです。次の世代が困らないように自分たちの経験を卒業生が新しい人達に伝えている。

—— そういう研修のサポーターを、最初、1期生が2期生、3期生に教えていき、そして今年の第8回では、ほとんど6期生とか5期生の子が中心になっています。経験を残して次に伝えるという流れができあがりつつある。

**質問** 悪気はなかったにしろ、名人から怒られたことはありますか。

—— あまり怒られたという話は……。

—— 怒られたというか、名人のほうが高校生が取材に来ることを把握していなかったりすると、「こんな電話が来たんだけど、これは一体何だろう」という問い合わせがあったりとか。あとは、名人は高齢の方が多いので、まずはうまく電話でコミュニケーションがとれない。耳が遠かったり、ぜんぜん言葉がわからなかったりして、高校生が何を言ってるかわからない。そういう話は聞きますね。

—— 東京の子が秋田に取材に行くこともあるので、秋田の方言が東京の子はわからないんですよ。電話ではもう本当に大変だと思うんですけど、たまに事務所に「方言がきつすぎて、言って

いることがわかりません」という問い合わせも来るんです。そのときは、たとえば息子さんがいれば息子さんに間に入れてもらうとか。アドバイスをします。

**質問** 「この子、成長したな」と思う瞬間はありますか。

—— 毎年、3月に一年の成果発表会を東京でします。夏のときは、みんな何をこれから何やるんだろうと、わからずに集まってくるし、結構、先生に勧められて参加をするという高校生も多くて、授業のときも下を向いている子が多い。でも3月の発表会のときになると、みんな目線が上になるというか、話を聞こうという姿勢が感じられて。その点、人の話を聞くという部分については、すごく積極的になっているし、先生方とか保護者の方にもアンケートをとって、いろいろ生徒さんの変化とかを聞くんですけども、積極的になったという回答を多くもらっています。

—— できあがったレポートもおもしろいものなんですけど、高校生がそれを終えて1年間の感想をまとめてくれるんですね。その感想文がなかなかおもしろくて。名人との出会いの後、聞き書きをレポートにまとめるために何回も何回も名人の言葉を聞いて、それをまとめていくなかで、その名人の言葉と自分が言いたいことがだんだんシンクロしてきて、たぶんそういう名人との出会いがなかったら思わなかったようなこと、そういった名人の暮らしに対する親近感のようなものが生まれる。家へ帰って真剣に考える、本当に自分の経験したことをすごい真剣に考えるようになる。

なので、3月に集まったときに、それぞれの名人のことを紹介してねというのと、自分の会った名人を本当にすごく一所懸命に紹介してくれたりとか、その名人が抱えている問題について何ができるのかをすごい熱く議論をするようになったりとか。たぶん、夏の研修のときだと、まずそんなこと興味のなかった子が、すごく熱心に変わったりとか。そういうのも見られますね。

**質問** 高校生がいちばん苦労している点は、アポ取りですか。

—— 録音したものを書き起こすことが大変です。だいたいインタビューは最低で2時間で、もっと長い子もいます。基本、取材に2回行ってもらっているんですね。1回目はやっぱり緊張していて、うまく話が聞き出せないこともあるし、1回目の取材の録音を聞き直すと、「これって名人、何て言っているんだろう」とか、「これはどういうことを意味しているんだろう」というわからないことが出てくるので、そういった部分を確認するために2回目の取材を行ってもらっているんです。だから、2回の取材をトータルすると、最低でも4時間、多い子は6時間、7時間、8時間という長い時間になる。それを書き起こさなきゃいけない、学校の授業もあるなかで。

それ以上に苦勞するのはまとめですね。書き起こしも大変だと思うんですけど、それを最後にレポートにまとめるときに、事務局からは5000字から6000字ぐらいにまとめてきてくださいとお願いしているんです。最初は5000字、6000字ってすごく量が多くて大変だとみんな思うんですけど、実際、書き起こしたものの量のほうがはるかに多くて、名人が語ってくれたすべてのものは、彼らにとってはすごく大切な宝物みたいなもので、どこを削ったらいいのか悩みます。絞り込まなきゃいけないという作業が、いちばんやっぱり大変になっているのかなと。

第三者が作品を読むわけで、名人が言いたかったことをいろんな人にも知ってもらいたい。まとめていくなかでそういう思いが芽生えてきて、名人が自分に語ってくれたことは一体どういうことだったかと考えていく。そのうち名人が伝えたかったことが、自分も広くいろんな人に伝えたいことに、徐々にシフトしていくというか。名人と自分が一体になっていくような感じになる。だからいちばんレポートまとめで大変なのは、何が言いたかったかを考えながらレポートにまとめるという部分だと思います。

作品としては、毎年、100人分なので、電話帳のような冊子ができあがるんですね。これは去年のものなんですけど。そのなかで、高校生のしつ

かりと話が聞いているなとわかる。

梅崎 うちのゼミの雑誌は、記事にも質問を残して、対話形式にしています。こちらでは一人語りですね。

—— もちろん高校生が名人に質問するんだけど、質問は削っています。ただ、名人の話したことだけを文章にしていたら読みにくいです。たとえば「あそこにある木を」という表現で、「あそこ」をそのまま文章にしたら何の木だからわからない。だから、「あれ」とか「これ」というのを補ったりとかしなきゃいけない。たとえばこの冊子のなかで、「日本に来たきっかけは何だったんですか」という質問があって、「旅行ね。フランス人の友人が日本に住んでいたから」という答えがある。質問なしで、いきなり「旅行ね。フランス人の友人が日本に住んでいたから」という文章から始まったら、何のことを言っているのかわからない。あたかもこの方が一人でしゃべったかのように、高校生が文章を直さなきゃいけないんですよ。だから、「日本に来たきっかけは、フランス人の友人が日本に住んでいたから」というような形で、自分の質問と相手の答えをうまく組み合わせる。補いながら相手の方が一人で話しているように文章をまとめていく。

—— 高校生は名人のところに行く前に、質問事項を考えるために名人のプロフィールをもらうんですね。そのなかにももちろん、名前も生まれも、あと簡単な経歴も書かれているんですけど、そういうのは全部、名人に語ってもらわないとレポートのなかにまとめられない。だから最初に、わかってはいるけれども、「すみません、お名前を伺ってもいいですか」から始めると、名人が「私の名前は〇〇です」と。で、「生まれはどこですか」って、1からぜんぶ名人に答えてもらえるような質問を考えていかなきゃいけない。指示語で言われたときに「それはどこですか」とか、もっと詳しく聞く。たとえば「この時期にやるんです」って、「この時期っていつですか」とか、詳しく話を聞いていかないと最後にまとめるときに高校生自身が困ってしまう。そういうことは、研

修のなかで卒業生が伝えてくれる。

梅崎 パンフレットをみると、聞き書き以外の活動もされていますね。

—— 卒業した OB、OG たちが、せっかくこうやって名人からいろいろなものを教わったので、それを自分たちで実践に移したいということで、共存の森という活動をしているんですね。それが、この共存の森の NPO の母体となる活動なんです。いま全国で5カ所、主に里山といわれるような農山間地域に入って、聞き書きの卒業生たちを中心に、大学生、高校生、あと卒業したばかりの社会人、そのメンバーで森づくりとか、地域の方から話を聞いたりして地域づくりの活動をしているんです。森に入って下草刈りとか間伐とかの体験もするんですけれども、それだけじゃないです。高校生のときに森とともに暮らしている人達に会って、森と人の暮らしを目の当たりにしてきたメンバーなので、単に森づくりといっても、森の整備をするだけではなくて、本当にそこにある暮らしというのを見たいと思うのです。その里山のフィールドとなっている場所に住んでいる方々と一緒に活動しながら、そこでの暮らしというものについても話を聞きつつ、学びつつという形で活動をしています。

そのなかで、しっかりした聞き書きではないんですけれども、インタビューや話を聞く時間をもっています。それもまた聞き書きの成果というか、いろいろなところで活用されていますね。

—— 各地区の活動がこの会報のなかにも載っています。新潟では、山のいちばん再奥にある集落で活動させてもらっていて、たとえば去年だったら、そこにある100ヘクタールの棚田で集落の人はみんな田んぼをつくっているんですけど、その米づくりと棚田のこれからについて地元の方に話を伺って、それをマップにまとめていたりとか。

あと愛知県では、ちょうど今年の春から始まったのですが、まずこの地域を知ろうということで、地域の方と一緒にこの地区内を歩き回って目につく珍しいものとか気になるものを、「あれ

は何ですか」と調べる。たとえば、「屋根の上のところに着いているマークは何ですか」とか、「ここに出ているのは何に使うんですか」とか、「山のところで、突然あそこで森が切れて野っ原になっているんですが、あそこは何があったんですか」とか、そういった部分を聞いていくやり方です。地元学といわれる手法なんですけれども、地域の人たちに聞きながら地域を知っていくという形です。

梅崎 私も、去年は伊勢市に行ったのですが、そこでも聞き書きによるまちづくりをしていました。ただ最初の1回目ぐらいは地元の大学生もやってくれるんですけど、話したい人と聞きたい人を見ると、だんだん聞きたい人が少なくなるんです。つまり、継続的に聞き書きを残そうとすると、本格的なのでテープ起こししていると労力がかかりすぎるのです。もう少し簡易バージョンにしないと継続は難しいのかなと思いますね。

—— それはありますね。いま各地区で、いろんな方からお話を聞く際に、実際にテープを回して聞く場合もあるんですけど、全起こしをしてこういう聞き書き甲子園のような形でレポートをまとめているかというところではなくて、要所、要所、ポイントをつかんで模造紙で発表したりとか。地域づくりの卒業生たちの活動では、そういう形のまとめ方になっていますね。

—— 去年は大阪で工業地域の職人さんたちの聞き書きをやるので、私たちの聞き書きの技術を教えてくださいという依頼があって、卒業生たち何人かを連れて教えに行ったんですけど。これは本当に「森の“聞き書き甲子園”」の工業版みたいな感じなので、きっちりしたこちらが教えた通りのつくり込んだ作品にはなっています。ただ、これも継続してやるためには、毎年、毎年高校生を募集して、そのためだけに時間を使ってやるという感じで。

梅崎 ところで、逆に語り手の人が、毎年高校生が来ると変わったりしませんか。

—— 変わりますね。元気をもらうということがいちばん多い。自分にとって当たり前のことに、

高校生が反応するので驚く。それがまた勉強になるとおっしゃる方もいます。名人さんにとっては本当に、自分が亡くなる時はこの「聞き書き」を柩に入れたいというか、それぐらい思い入れがあるものに仕上がっているみたいです。

去年、森の名手・名人フォーラムというのを開催して、いままでに選ばれた名人の方々に声をかけて、長野県の上松町で、木を使った手業を持つ職人さんの文化を学ぼうというフォーラムを開催しました。そこには、本当に各地から20名近くの名人さんが、いろんな地域から集まってくださって、それがきっかけでいろんな職人さんと林業の方とのつながりもできたというのがありました。

そういった名人さん同士のつながりをもっと拡げていきたいという声もあったし、こちらもネットワークをより拡げていきたいという思いで、今年もまた奈良県の吉野林業で有名な川上村というところで、名人フォーラムを開催する予定です。  
質問 名人がつくった商品聞き書き甲子園公認みたいなことで売ったりすることは？

—— 販売することはないんです。ただ名人に認定されて、地域で話題になり、それがきっかけで注文が増えたというような話はけっこう聞きます。  
梅崎 最近、キャリア教育の一環として、「体験型でインターンシップしましょう」と言われているんですけど、私はインターンシップのような直接体験よりも間接体験の方がいいと思うんですよね。聞き書き体験の教育効果は複雑でおもしろいです。

インタビューがうまそうだなと思った子が、それほど聞けなかったり、一見すると「大丈夫かな」という子が、作品を上げてみるとよく聞けていたりする。学生のエピソードはありますか？

—— 集まる高校生が本当に様々なんですよ。先生方から紹介された高校生もいれば、いまファミリーマートさんにも協賛してもらっているの、コンビニの店頭でちらしを見て募集してくる子もいる。やる気がある子もない子もバラバラなんですけど、でも話を聞くときに、あまりにもスマー

トに聞き過ぎてしまって、なかなか深いところまで聞けないこともあれば、行ってこいと先生に言われたから渋々行ってきた子が、名人の話を聞いたらすごいおじいちゃんの話がおもしろくてと、すごいよく聞けることもある。すごいいい作品をつくって来てくれました。

だから、本当にそれは組み合わせであり、その子のひっかかるものがピタッと合うところとか、未知数な部分はあると作品集を見ながらいつも思っています。きっかけなんだろうなとは思いますがね。

梅崎 やっぱ「聞き書きだからきっかけが生まれる」と思いますか。

—— 1対1だからというところが大きいと思うんです。

梅崎 たとえば、「感想文を書きなさい」という課題でも、それはそれで効果があると思うんですけど、やっぱり学生って、学生であることに慣れていきますから先生が喜びそうなことを書きちゃうんですよね。こういうプロジェクトだったらお決まりのように、「やっぱり森は大切だと思いました」みたいな、「環境を大切にします」とか。「環境を大切にします」というのは、行く前からわかっていた正解であって、そういうゴールにたどりつけば、一応このレポートは完成なんだよね、という予定調和があります。もっといえば、いい点数をもらえるんだよねという想いがしみ込んでいると思う。

そういうのは破壊しなくちゃいけないわけで、やっぱり聞き書きだと自分を書くというのではなくて、他人を書くことで全部自分が消えるわけですね。そこに感想文じゃないよさがあると思っていてるんですね。科学的根拠があるわけじゃなくて、学生を見ていると思います。

—— みんな「最近、環境問題はどうか」という、本当にニュースのようなものが動機となって集まるんですけど、終わった感想文には、実際に生(なま)で会って直接聞いた話なので、すごい具体性がある。それが一個一個どこかで聞いた話じゃない。だから、本当に具体性をもつという

ころが聞き書きのいいところでもあるなど。

**梅崎** この感想文なんかも、「身の回りの情報を鵜呑みにするだけでなく、自分の目で見、耳で聞き、手で触れることを通してこそわかることを、大切にしていきたい。そうすることで、身の回りのあらゆるものが、自分にとって生き物に見えてくると思う」と書いてあります。こういう実感というか、聞き書きの感想もちょっと変わってきておもしろいと思うんですね。

—— 作品集を提出するときに、「名人に取材したときの感想も添えて提出してください」というと、だいたいみんなレポートをまとめるのでいっぱい、いっぱいなので、そのときの感想は「名人と会ってドキドキした」とか、「いろんなことが学べてよかった」とか、まさにありきたりの感想しか書いてこないんです。それが一回作品を提出した後に、再度高校生たちに「名人の印象に残っている言葉は何ですか」とか、「名人の話を聞いて、どんなことを感じて、あなたはどのようなことを学びましたか」というような、再度感想文を書いてもらっているんですけど、それがこの文章なんですね。そうすると、もう一度振り返りをして、ありきたりの文章でなく、自分で咀嚼した部分から出てくるものがここに出てきているのかなと。

**質問** 名人の方は、高校生の方と会ってどういった感じをもっているのですか。

—— はじめは、「仕事の切り口で名人さんの話を聞くように」と、こちらからは話をしているんですけど、結局名人が語りだすと、仕事の話だけではおさまらなくて、自分がどういう人生を歩んできたのかも話しますよね。「名人さんが、すごく目が輝いていた」とか、「かつこいい」とか、そういう憧れる人になって帰ってくる高校生が多いです。

**質問** 「聞き書き甲子園」のテキストである「塩野さんの聞き書き術」のなかに、自分の親だと素直に話を聞けないんだけど、知らない相手というか、他人なら素直に話が聞けるというお話があったんです。やっぱりそこは大きいですか。

—— やっぱ自分の親に話を聞くのって、皆さんどうですか。できそう？ お父さんに人生の話やお仕事の話聞くのって、どう？（笑）お祖父さんだったらできるのかなって思うんですね。お父さんも自分の息子に話しだすと、だんだん説教じみってくる（笑）。それを聞いている息子は耐えられなくなって来て、だんだんバトルになってくるとか。だけどお祖父さんから孫の世代って、息子にはちょっと言えないけれども孫には、という部分がある、話しやすい。だから多分、高校生とお祖父さんて、すごくいい組み合わせなんだろうなって。もし興味があれば、自分のお父さんに一回聞き書きをしてみたりとか。それがうまくいか、いかないか。

—— もちろん、お祖父さんでも難しいです。いろいろと家族には言えないこととかもあるじゃないですか。パッと来た高校生には、そういうことも話せるというのがあるし。聞き書きの作品を読んで、「お祖父さん、じつはこうだったの」というのを後から知ったということも聞きますね。

いまはお祖父さんやお祖母さんとほとんど一緒に住んでなくて、なかなか会う機会もないと思うんですけど、そんな日頃会わない世界で直接話ができる。高校生にとっては緊張だけかもしれないけど、お祖父ちゃんにとっては嬉しいことだし、いろいろと話してくれるんじゃないかなという気がします。

**梅崎** 高校生は交友関係が狭いですよね。大人と話す機会も大学生より少ないと思うけれども、高校生のインタビュー力が高める訓練があれば、教えていただきたいなと思ったんですけど、どうでしょうか。

—— 逆に、その部分はあまり指導をしてなくて、ただ、「あらかじめ何を話したいかというのを、プロフィールをもとに考えてみなさい。勉強していきなさい」とは言っているんです。そのまんま行くから、逆に質問がなかなか出てこなくてすごく間があいてしまう。だけど、高校生の感想文を読んでいると、何か聞きたいけれど質問の言葉にはなっていないけど、高校生がかもし出してい

る雰囲気名人さんは感じるんですね。だから、名人さんも待っていてくれるんですよ、彼が話しますのを。そういう、言葉にはなっていないけど、その場の空間の雰囲気って、すごく大事かなと。

逆に、スピーディーに何でも次から次へと質問するからよいというものでもない。「この名人のこんな部分を聞きたい」という部分を持っていけばいいと思っています。そんなスムーズにいくものでもない。

——取材に行く前に、質問をアドバイザーと相談して、なるべくたくさん考えていく。職業についてもわからないことばかりなので、ある程度調べていく。下準備をして行くと、ある程度スムー

ズに話ができる。あたりまえかもしれないですけど、それも大事だなと思います。

あと、取材に行くと、1対1というところが大事です。相手と自分しかいないコミュニケーションの空間も、また質問を引き出すきっかけにもなりますね。

梅崎 教えようと思っても限界がありますね。ですから、教えにくいというのを日々感じています。とにかくいろいろ負荷をかけて、いろいろアポをとる訓練をさせる場を増やすしかないのかな、と思っているんですよ。いろいろ勉強になりました。ありがとうございました。

一同 きょうは、どうもありがとうございました。

(終了)